
幼馴染の親友

世羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染の親友

【Nコード】

N4353X

【作者名】

世羅

【あらすじ】

せりかと玲人はお隣さんの幼馴染。今までいつも一緒に親たちの良好なご近所関係の為、協力し合ってきた戦友だったが、高校入学で首席の妖しい魅力を放つ超絶美少年な彼、橘忍とせりかの接近で二人の関係にも変化が？

彼、高坂玲人こうさかれいじと産まれてからこのかた16年のお付き合いである。

いわく、隣に住む幼馴染は眉目秀麗で、頭も良く、サッカー部のエース格でいつも黄色い声援を浴びている。

当然の事ながら、私、椎名せりかは、両親から同じ歳であるお隣の息子さんと比べられ、育って来たので色々な努力を余議なくされた。

彼は178cmと長身ですらったとした細マッチョ!!これは幸い私も163cmと並んでも見劣りしない。しかし、太らない様に毎日の半身浴、こっそりとビリー隊長に入隊したり、コアリズムをしたりとその時々流行を追いつながら、美容にもかなり力を入れている。

まあ、今時の高校生なら当たり前だが、私の場合それは小学生の時からの日課で、パックをしたり、日焼け止めを欠かさなかったりとそれはかなり異常な頑張りであったと今になって思う。

その甲斐あってか近所では綺麗な娘さんねと言われている様なので、親もまあまあお隣さんに見劣りしない分卑屈にならずに済む様なので、努力はある意味報われてはいると思う。

本当は、高校も別の所に行きたかったが、優劣の差が出ると近所付き合いにも影響が出そうだったので、彼と相談して県下一の公立高校に決めた。

そう。ある時期から玲人と私は共同戦線を張る様になったのだ。お互いの親同士の平和の為に勉強は二人で分からない所を教え合い、

ほぼ同じ点数を取れる所まで徹底的にやるので二人とも苦手教科が無くなった。水泳の苦手だった私を玲人が特訓してくれて今では平均よりも早く泳ぐ事が出来る。周りは二人仲良く遊びに行っていると思っていたが、その実はそんな事をして二人で助け合ってきた。

当然、一緒にいる時間が兄弟がお互いいない事も手伝って長くなる。

そうすると、どうしても出てくるのが、付き合っているのか？恋人なのかという周囲の関心がくるが、これも二人で話し合って曖昧に付き合っているかいないか中間の態度を取りつつ、はっきりと問われた際は否定するという結果になった。

なぜ曖昧に付き合っている風にしないではいけないかについては、あまりにも一緒にいる時間をどう説明するかが他人に説明が出来ないからだった。

戦友と言って理解が得られないのは分かっていたし、私も彼も幼い頃から結んだ協定や影の努力をさらけ出す気は毛頭ない。

お互いの家も頻繁に行き来する為、年頃になった今は、母親達だってそれらしい事を水を向けてくるが、ここは、身内なので、はつきりきっぱりお友達、幼馴染、兄弟みたい、の域を超えない事ははっきり告げておく。身内にまで曖昧にすると将来は・・・などと、どつばに嵌まってしまっは適わない。

今日も玲人が迎えに来てくれて、学校へと向かう。

近所のおばちゃん達に愛想よく挨拶しながら、駅へと向かう。今日も玲人は爽やかだなくと笑いたくなるが、それはお互い様らしい。

「いつも、せりの猫被りに笑いそうになるから、自然と笑顔になって助かるよ」

「玲人の言葉そのまま返させて頂きます」

「うちの母親も、せりちゃんがお嫁に来てくれたらいいのにか言っただぞ、今朝」

「え、それはさー、玲人も親にはちゃんと付き合っていないって言ってくれてるよねー?!」

「もちろん。協定通りにはっきり言ってるけど、これくらいの歳の息子は照れてホントの事をいわない、みたいな話をうのみにしてるんじゃないかな? 多分」

「あー、そういう結論にいったらうのか。うちは女同士だから、そういう事はないね」

「しばらくそっちの家に行く事にするよ。せりんちはおばさん最近出掛けてるんだらう?」

「区民センターにイケメン講師が来てくれるからって今更、英会話だよ?」

「いいんじゃない? 幾つになっても海外旅行とかには役に立つよ」

「今だけブームだし楽しそうだからいいんだけど若干引くっていうか・・・」

「うちだって韓流スターのナントカのポスターやらDVDとかで溢

れてるよ」

「どこのおかんも似たりよったりって訳ね。仕方ないか」

電車で学校の最寄り駅に着いた所で玲人の親友の橘くん後ろから声をかけられた。

「おはよー」

玲人と私とでハモると橘くんは柔らかい笑顔を見せた。うわあー！
！顔赤くなりそう。

だって、だって、私の片思いの男の子はこの橘忍くんたちばなしのりなのだ！！

本人にはもちろん玲人にだって知られてない。この事を話しているのは、同じクラスの親友の森崎美久もりさきみくと齋賀弘美さいがひろみだけだ。

玲人にバレるのだけは、絶対避けたい。何故かって、そりゃーいいようにからかわれるのが見えているからだ。玲人に同じ事が起こっても面白くて私だってそういう行動にでると思うから、分るだけに絶対、絶対に秘密なのだった。

何時から橘くんの事を好きになったのかは、多分、もう半年以上前の入学当時からだったと思う。

彼は、入学式に新入生代表で挨拶をしていた。トップ合格と言う事だ。私も玲人も自己採点でいいセン行っていたから、半分以上本気で、どっちかだと面倒だよなんて言っていたけど心配は杞憂に終

わった。

どんだけガリ勉くんなんだと自分の事を棚に上げて彼を見てみると、すつきり通った鼻筋に、綺麗な目元に淵のない眼鏡を掛けた秀麗な容姿の持ち主であった。よどみなく読み上げる声もなかなか良い感じだ。

天は、二物も三物もおまけも与えるのねくなんて思いながら、すっかり見惚れてしまった。他の新入生も多数の女子生徒が彼に見惚れていた。

玲人もすぐ後に、『あんな奴いるんじゃないく』なんて言うから、『モテたいの?』と聞くと苦笑して『それは、そうでもない』と言った。玲人は本当は橘くんみたいな、いかにも人気が出るような男子がいて良かったと思っているから、逆の言葉を言ったのだろう事は私には分かっていた。

一緒にいる私に迷惑を掛けたくないと思っているのだろう。中学迄は、皆が昔からずっと一緒にいる私達をセットとみなしていたから、あまり問題も無かったが、高校ではそうはいかないだろう。

少し離れる選択も二人で話し合っではいた。選択肢のひとつではあるが、今迄の事を知っている友達も数人この学校に来ていたので、他人の振り(他人だけど)も不自然だし不便だから問題を保留にして様子を見る事になっていた。

しかし、カメラを抱えながら、両母親が、並んで門の前に立たせるのだから、やっぱり他人の振りは無理の様だ。

帰りも当然一緒に帰る事になる。新入生の初日から男女で並んで歩

く私達は当然目立つ。玲人が目立つから余計に目立つのよ!と心で悪態を付きながらも、秀麗な優等生の橘忍くんが、明日からの話題の中心だろうと考えると、玲人が彼の影に隠れてくれるだろうと思っただが、これがとんだ誤算になる事は、この時は予想出来なかった。

クラスは玲人が一組私が五組だった。寂しいというよりもほっとした。これで物理的には離れていられる。

玲人と別れてクラスに向かうと同中の森崎美久がいた。彼女とは中学の時から親しくしていた。

「せりか、おはよう。同じクラスに知り合いいて良かったよ」

「おはよう。私も美久がいてよかった!」

「でも高坂くんとは離れちゃったね」

「玲人? 玲人は離れたってうちが隣だし、学校でまで一緒じゃなくてホッとしてるの。私も高校生になったんだから彼氏の一人や二人欲しいもん」

「そこは、一人で充分でしょう」

「物の例えよ。もちろん一人でいいのよ、良い人ならね」

「そういえば、カッコいい人見つけちゃった♪橘くんって昨日挨拶した人！高坂くんと甲乙つけがたいよね」

「あー！あの人、玲人の何倍もカッコいいひとね。しかも頭も抜群にいいなんてすごいよね」

「せりか・・・あんた高坂君見慣れ過ぎだからそんな事言うけど同レベルだと思うよ」

見慣れ過ぎは、本当だけどなんだか昨日の橘くんは、私には蝶の粉が舞う様の様に煌々と見えた。桜はもう散ってしまったけれど、桜舞う中を歩く彼の姿を見てみたかったなと乙女チックな事を思う。

一瞬の静寂が訪れて皆の視線を見ると彼に注がれていた。

知り合いが数人彼に寄って行くと、ふんわりと優しく微笑んだ。近くで見たそれは、とても綺麗な笑顔だった。

周りもざわつくが、本人は慣れているのか気にした様子はなく、自然体で笑みが絶えない。

「びっくり！五組だったのね」

声を潜めて美久に言う「知らなかったの？」と返された。玲人と自分のしか見て無かった。

HRが始まり、皆席に着いた。担任は年配の女性教師で、少し厳しそうに見えた。

全員の自己紹介が始まり、中学と名前しか言わないから、直ぐに最後まで終わった所で、担任が言った。

「学級委員長はこちらで指名します。委員長は橘忍君お願いね」

「はい」

まあ、みんなも予想通りだなという空気が流れる。

「副委員長は椎名せりかさんお願いしますね」

「…はい」

思わず舌打ちしたくなったが、これ以外の答えは許されない。以前も学級委員にはなっていたが、雑用が多く、何故自分が・・・という気持ちが強かった。しかも彼と一緒にというのが更に追い打ちをかける。彼と一緒にでは玲人というより何倍も目立ちすぎる。元々、玲人の時に若干の嫉妬の混じった視線を受けていたせりかは、いくら橘がカッコよくとも観賞するのがいいのであって、彼氏は自分と性格が合って楽しい人が良いなと思っているので、彼は、せりかの中では彼氏候補にも入らない。羨ましいなら替わってあげたいが、実際に委員をやりたい者は少ないだろう。

やはり初日から委員の二人は残らされて、各教科の名簿作りをする。単純作業だが、結構量がある。黙々と仕事を進めると彼が話し掛けてきた。

「やっぱり大変だよな。でも椎名さんが仕事早いから助かった。前も委員とかやってた？」

「うん。こういうの慣れてはいても面倒よね。一学期だけとか言っても一年やる事に成るのは目にみえているしね」

「そうなんだよな。誰もやりたがらないから最初決まった人間が一年なるんだよな。部活も始まるから本当参ったよな」

「もう部活決めてるの？」

「サッカーやってたから。ここ進学校の割にサッカー部強豪で楽しみなんだよな」

玲人も多分聞いてはいないがサッカー部に入る事になるだろうなと思う。運動部で一年生は準備などあるから、こうして委員の仕事はきついだろうと思われた。

「残れない時は、これ位の事ならやっておくからサッカー部に行っているわよ」

「それは、悪いよ。先輩にも委員の仕事だっていうから大丈夫だよ」

「でも、いくら進学校のうちでも強豪のサッカー部にその言い訳通じないよ。一年生の初めなもの」

「：椎名さんは優しいね。それに運動部の上下関係良く分かってるみたいだけど、椎名さんこそ部活は？」

「私は入っても文化部だから大丈夫。文化部は委員の仕事やってる

先輩もいるからそういうの甘いのよ。準備もないしね」

「悪いけど出来るだけの事はするけど迷惑かけちゃうと思う。ごめん。少し落ち着いたら融通効くと思う。部長が同じサッカークラブ出身で知り合いだから」

「無理しなくてホントにいいよ。今迄もそんな感じだったし・・・」

言いながら玲人の事が心配になった。多分一組で委員の仕事に就いているだろう。副委員の子は玲人を部活に送り出してくれるのだろうか？

「あのね、私の幼馴染が多分、委員になってて、多分サッカー部に入るのね。それで遅れちゃって準備の当番とかこなせなさそうな時は、替わってあげてもらえないかしら？」

「うん。いいけど、多分が多いね」

橘くんはおかしそうにくすくす笑う。やっぱり笑顔になると彼の秀麗な顔の造りに華やかさが出て、ぐっと妖艶な雰囲気変わる。せりかにはやはり彼の周りに煌めく粉が降るように見えた。

「それで、その椎名さんの幼馴染くんは名前は？」

「高坂玲人というの。一組なんだ」

「わかった。出来るだけフォローするよ。委員の仕事も多い時は、部活終わったら交代するからね」

「良かった。ありがとう！」

「いや、こちらこそ本当に助かるよ。椎名さんがパートナーじゃなかったら初っ端から先輩ににらまれちゃってたよ」

「新入生代表だもんね。目立ってきついよね」

「うん。実際そうなんだ。いい気になるなとかって思われてるんだろうな」

「それは、否定出来ない。そういう中でやっぱり遅れて行ったらよくないと思ったのです」

急に丁寧語でせりかに諭されると、また橘はおかしくて笑みが漏れる。せりかがそこまで心配する幼馴染がどんな奴かも興味が出てきた。このままいけばチームメイトになるわけだ。

作業が終わって職員室には橘が行ってくれた。駅までは一緒だし、送ると言われて断り切れずに彼の鞆を持って昇降口で待つ事になった。

「せり？」

薄闇の中だったが直ぐに玲人だと判った。

「玲人も委員になっちゃった？サッカー部に入るの？副委員の子は？仕事代わりにやってくれそう？」

「せり、質問多過ぎ。とりあえず委員になったし、サッカー部にも入る。両立大変そうだけどなんとかなるだろう。副委員の子には協力は一応頼んだ。バス通学で方向違うから先帰ってもらった」

「そうかあー。心配し過ぎだったかも」

「じゃあ、帰ろうか？」

「まだ帰れないの。相方待ってるから」

「俺と一緒にマズイ？」

「ううん、むしろ待ってて。紹介したいから」

「せりのとこの委員長を？なんで？」

「サッカー部に入る人だから！チームメイトになるでしょ。玲人が委員の仕事で遅れた時とかのフォロー勝手に頼んじやったの」

「それは、せりがそいつの仕事引き受ける前提だろう？そんな事だめだ！！」

「玲人が委員長の時の副委員の時は自分は部活行くって言って私にやらせて平気だったじゃない。それに、玲人の事が無くても困るの解るのに放っておけないの！！」

「・・・ごめん。お待たせ。なんか俺の事で揉めてるみたいだから、口挟んで悪いんだけど、なるべく椎名さんが負担にならない様に考えるから」

「お前、新入生代表の奴か？」

「そう。橘忍。よろしく。椎名さんと一緒に五組の委員の仕事する

事になって、サッカー部に入る話したら、協力してくれるっていう話になって悪いからって言ったら、幼馴染が入るからサッカー部の準備当番とか助けてくれっていう話になって・・・君が高坂？」

「一組の高坂玲人。そいつとは、家が隣で生まれたときからの付き合いだ。俺も橘のフォローするから委員の仕事も二人で話し合っつきちんとやろう。もちろんお互いのパートナーにも多少は、迷惑掛ける事にはなるけど協力すれば何とかなるだろう？」

「ああ。そうだな。出来たら俺も椎名さんに迷惑掛けたくないから、高坂と協力してやっていきたい」

「じゃあ、決まりだな。よろしく頼むな」

「玲人、そういう事なら一組の副委員の子とも友達になってタッグ組みたいから今度紹介してくれない？」

「せりが無理しなくてもいいから」

そこからは、歩きながら先にこうなる事を見越して部長さんに色々としきたりめいた事を聞いている橘くんは、サッカー部の大体の仕事の流れと許されそうな範囲を説明して、二人で打開策を練り始めた。駅に着くころには二人はすっかり相棒と化していて、ケータイのアドレスを交換していた。橘くんはわたしのも教えて欲しいと言ったのでとりあえず私達も知っていた方が便利だろうとアドレス交換をした。

晴れてサッカー部に入部し、練習に行く二人を見送る。教室に残る生徒からの視線が、かなり痛い。

せりかは、橘と少し近付き過ぎた事に後悔し始めていた。

昨日は薄闇の中で、愚かにも気が付かなかったが、玲人と橘が二人連れだって歩く図は、酷いくらい絵になった。酷いというのは、せりかの心情からでた言葉だが、とても人目を惹く。一人一人でも充分に華をしょって歩いている様な二人が仲良さそうに歩く図は、それは、それは二乗されて美しく、筋肉質な玲人に比べるとやや華奢にみえる橘は、見方を変えようと、やや倒錯的にも映る。

男女限らず振りかえられる二人は飄々と足速に部室を目指す。

しかし、橘も悪目立ちでキツイと昨日洩らしていたところを見ると、こちらからは平気そうでも本人達もポーカーフェイスなだけかなと思う。玲人に比べると橘は中身は繊細そうだった。せりかに話をする時の距離の取り方や、昨日の玲人の非難に対する対応を見ても、配慮があつて大人だと思う。そう思うと玲人は天真爛漫までは言わないが、比べれば無邪気な方だ。すっかり昨日橘に懷いてしまった玲人は、放課後早々に橘を迎えに来たのが、せりかにとっての悲劇であつた。玲人もせりかの紹介で橘と仲良くなったからだろうか、せりを先に呼び、彼を迎えに来た事を告げた。目立つ容姿の玲人の突然の来訪に皆がぼかんとしているところに、追い討ちの様に橘に「行って来るね」とにっこりと新婚さんのような言葉を掛けられた。無視するのもなんだと慮つての事だが、かなり要らない配慮だ。

せりなは、部活見学を約束していた美久と一緒に逃げる様に教室を出た。

「すごかったねー♪なんかもう眼福って感じ？ W王子様に囲まれて羨まし〜」

「そんなにいいもんじゃないの、美久は付き合い長いんだから知ってるくせに」

「いやー二人並ぶと迫力あるから、びっくりしたよ。あの二人もう友達なんだ？ なんだか似合うというか、逆に似合い過ぎてちよっとっていう気もするコンビだね」

「私がうっかり紹介しちゃったの。同じサッカー部に入るって聞いたから」

「橘くんってすごいね。トップ入学でサッカー部に入るなんて、文武両道？ しかもルックスが抜群だし」

「本当にそうね。たとえ本人の努力が有ったにしても、不条理を覚える人ではあるわね」

「でもせりかも仲良くなったんでしょ？」

「うん。まあね。仲良くなっていても話してみたら向こうがすごく大人な人で、玲人が懐いちゃったのよ」

「性格もいいんだ〜。益々ファンが増えそう。競争率高くなりそうだから頑張らないとね」

「私はやめとく。玲人とずっと一緒に大変だったの、やっと少し解放されそうだったのに、これ以上厄介事を呼び寄せたくないもの」

「勿体ないと思うけど、せりかもなんだかやつれてるし、そう思うのかもしれないかもね」

「私は、普通にちょっとだけカッコ良くて優しくて可愛い感じの気の合う人がいいの！」

「なんだかせりかって、微妙に残念なトコが可愛いのよね。一見しつかりしてそうにみえるのに」

「何よー。残念な事なんてないわよ。私は普通の幸せを願ってるだけなんだから」

「じゃあ、その微妙な彼を連れて来て見せてくれるの楽しみにしてるからね」

絶対連れて来てやる！！と思うが、私だってそんなに全体に丁度いい人が簡単に見つかるとは思ってはいない。玲人や橘みたいな素敵な人達は目立つから直ぐに発見されるだけの事だ。気が合うとかは時間を掛けないとわからないしやっぱり難しいのかと思う。

家に帰り、夕食と入浴と腹筋などのいつもの自己流美容メニューをすませてから、今日の復習をしていると、部活が終わった玲人がやって来た。

「もう、始めてるんだ。偉いね。せりは」

「猫撫で声出すって事は分からないトコあったんでしよう？今日の分は、聞いてくれて大丈夫だよ」

「流石、せり様。いつもの事だけどホントに助かってるよ」

「お互い様！持ちつ持たれつでしょ」

「そうだけど、せりと一緒の学校にして良かったよ。やっぱり」

「そうだね。違ったら一緒に勉強出来ないもんね」

「大学もせりと同じ所にしようかな」

「な、何言ってるの！まだ高校入ったばかりだし、大学は将来の事も考えて選んでよね！」

「まあ専攻とかもあるから、そううまくは行かないだろうけど、出来ればって話」

「もう、玲人ってば、いつまで一緒に居る気なの？」

「何だよ。イヤなのかよ。こんなに付き合い長いのに俺、愛されてないんだな」

まずい。玲人が拗ね憎になってる。今迄も何度かあったけど、もういい加減子供じゃないんだし、この手の拗ねかたは、無しだ思うんだけど。しかも愛されてないって言われてもね。愛してるかと

言われればそれは違うし、逆に愛されていないのか？と言われれば愛情はあるんだけど……。ムズカシイ。お互いお年頃になって来たんだから？幼稚園の頃と同じ事言うのはやめようよと言いたい！しかし言ったらもっとメンドクサイ事になるので「そんな事ないよ」と言っておく。

「とりあえず、勉強しよう。ね！」

「数学でいまいち理解しきれなかった所、教えて」

「うん。これは・・・」

説明を始めると元々飲み込みの早い玲人は一回ですぐ解るので、教えるのにそんなに手間が掛からない。その後は、他の教科の復習を二人で簡単にさらった。やはり、一人でやるより、効率もいいし頭に入る。その後、予習も半分ずつして、半分はお互いにレクチャーして、これで完璧、と二人とも満足した所で玲人が帰って行った。

なんだか今日の玲人は、幼稚園の頃、せりかが、他の男の子と遊んだ時と同じ拗ねかたをしていた。もしかすると橘くんの事が引っ掛かってるのかなと思うが、拗ねられる程親しくもないし、本来は恋人では無いんだからそんなに独占欲を持たれても困るのだが、それを彼に言うのは、築きあげて来た二人の仲の何かが壊れてしまいそうと言えなかった。

玲人は、今日帰り道で、橘がせりかの事を褒めるのを誇らしく自分

の事のように聞いていたが、なんだか、もやもやして来た。言われなくてもせりかが、優しく、思慮深く、可愛いけれども気取った所がなく気さくな性格で、おまけに面倒見も良いと言う事は、最初から分かっている。他人がそれを賛辞するのは珍しい事ではないが、ああ手放しに褒められると橘は、せりかが、好きなのだろうか？と勘ぐってしまう。まだ会って間もない橘にせりかを取られてしまいそうな気がして、不安定な気持ちから自分でも自覚する程、子供っぽい行動に出てしまった。自己嫌悪に陥るが、せりかが、昔と一緒に、「そんなことないよ」と愛情を否定しないでいてくれる優しさが、心に残った。

橘は男の自分から見てもかなりの美丈夫で、サッカーも体格にまかせて強引なプレーをする玲人と違い、テクニックに優れていた。自在にボールを操る様は、見ても気持ちがいい位で、レギュラー入りも受験の為に早めに引退するこの学校の三年生が、引退した後には確実だろう。それを奢った所も見えず、学年トップの成績は受験勉強を、死ぬほどしたからだと努力を隠そうともしない所が好感が持てる。俺とは全然違うと思う。毎日のせりとの勉強会が無かったら、俺の成績など知れている。お互い助け合ってはいても、サッカーに時間を取られる分、学業面では、どちらかというとせりに助けられていると思う。自分の方が助けたと思うのは主に逆上がりを出来る様にしてやったり、泳ぎのコツを教えたり、走るフォームの改善だったり、主に体育面が多かった。それでも、せりは今でも、その事を話題にして、助かったと言ってくれるし、勉強会も二人だと効率がいいと言って玲人の負担を軽くしてくれるのだ。成績が落ちると間接的にせりにも迷惑が掛かるので部活動をしながらも精一杯頑張るが、それは水鳥のように、下で足がいくらバタついていても見えないし、見せなかった自分と努力を恥じらう事無く見せる橘とどちらが正しいという事はないだろうが、それでも玲人には、彼が眩しく見えてしまう。今迄は自惚れる訳では無いが、せりかが、

自分よりも近しい男が出来そうに成っても、それを蹴散らす自信があったし、実際そうして来た。その事はせりかは知らないし、知らせるつもりもない。それ程たいした事もせずに少しだけ付き合っている男の顔で相手を睨めば、向こうが簡単に退いてくれただけだ。そんなつまらない男達に、せりかを渡せる筈も無いと大義名分を自分の中で作って来た。橘忍は、大袈裟かもしれないが、こんな出来た人間が世の中に存在した事に玲人が軽くショックを受けた程、精巧に神が造り出したかのような美しい相貌以外の要素も完璧だった。今迄の大義名分は橘の前では跡形もない。そんな人間が傍に居れば少なからずとも好意を持つのは、時間の問題だ。既に玲人でさえ、橘忍に魅了されている。せりかが、橘と付き合えば、きっとせりかと玲人の関係も変わってしまう。玲人の中でそれを、避けられる術を持たない以上、考えれば考えるだけ、思考は深みに嵌まってしまうだけだった。

3

「橘くんからメールだ」

せりかが呟くと玲人は僅かに眉を寄せた。最近文化祭が近い為、打ち合わせメールがよく届く。自分の所にも同じ様に副委員の石原沙耶からメールや電話は来るが、どうも一組よりは、五組の方が力が入っているのか、連絡が1・5倍位はある気がする。

せりは悩みながら、返事を返すと満足した様に微笑んだ。

「なにやるんだ？五組は？」

「えー！内緒だよ。他のクラスはライバルでしょ」

「たいした事じゃないじゃん。うちだって隠す事何もないし、別に教えるのに聞こうとしないし」

「だってこっちの言わないのに聞いちゃったら悪いもん」

「だって何も、随分他人行儀だな」

「子供っぽい事言わないの。文化祭の時に見に来てよ。そっちにも行くから♪」

楽しそうに、子供の様なワクワクした目で言われると、そっちの方がガキっぽいと言い返したい気分の玲人だったが、あまりしつこくして嫌われたくはない。ずっと幼い頃から一緒にいたが、やはり其処には見えない線が明確にひかれており、そうで無ければこんなに

長く居られない部分でもあった。

玲人のクラスはありきたりだが、執事&メイド喫茶という学園祭では最近一番多いのではないかと思われる催しもので、衣裳作りや喫茶のメニューなどが、女子の担当で、店の内装が男子担当という完全分業制で、部活動もある玲人には、とても有り難い、楽し加減だった。当日、殆んど執事役をやってくれば、内装も指示を出してくれれば、部活優先でいいと言うクラスメイトの気配りも嬉しい。実際、この進学校の中で真剣な運動部はサッカー部だけで他は同好会要素が強く、文化祭優先といった考えでいいらしい。運動部自体も入部しているやつは少数派だった。

対してせりかは、部活動は結局見学だけで入らず、帰宅部で暇なのかと思えば、今は玲人よりも忙しい。家では色々とチクチクと縫っているし、たまにミシンが出たままになっている。もともとせりかは裁縫の類が得意である為、面倒見の良さも手伝って無理しているのではないかと不安になる。帰りも結構遅く、部活動を終えた自分よりも一時間以上遅いのだから心配になる。迎えに駅まで行くと言っても、人通りも結構あるから、心配要らないと断られてしまう。経験上、ここで過干渉な事をする、とても距離を開けられてしまう。いつもより更に遅い時だけ、メールでどのあたりか聞き出して、コンビニに買い物があるからついでに・・・と言って何気なく迎えに行くが、其処まではせりかも拒否する気持ちは無い様で、『ありかとね』とすこし照れたように礼を言う。短い期間の事だし、毎日迎えに行かせてくれた方が精神的に楽なのだが、せりかには、譲れない所らしい。言わなくても玲人には、なんとなく理由が分かる。それは『彼氏の仕事』なのだ。それを玲人にして貰うのは、嫌だと言うよりも、今迄ずっとして来た線引きから越えることが、玲人の為にも、そして、自分の為にもならないと考えている様だった。

橘からも何度か送るという申し出を断っているというのを橘本人から聞いていた。せりは、変な所で頑なで真面目だ。自分はあるに面倒見が良いのにそれは自分では意識に無い様で、自分の事は出来る事は、頼らずに、出来ない事だけ己むを得なくお願いするといったスタンスだ。玲人は、せりかのそういう面はとても気に入っていたが、最近は頼られない事が少し、寂しく感じていた。

せりかのクラスは、実は劇をやる事になっていた。なんでそんなメンドクサイ事を・・・と内心思う。衣裳、台本、大道具、小道具、キャスト決めに、セリフ覚えとやる事が目白押しが一番手の掛かる代物だ。しかし、多数決で『シンデレラ』をやる事になった。理由は簡単だ。リアル王子様の存在が大きい。橘忍が舞台上に立てば、それはそれは見映えのする事にクラスの殆んどの者が目を付けていた。基本、賢い人間ばかりの集まりだ。何を効果的に使うかというのに長けた者が多い。其処に橘の存在は、大きく使わなければ宝の持ち腐れであると考えられていた。学年中の有名人でもあり、客寄せにも持ってこいな訳だ。橘は基本、本当に大人な人だと思う。嫌な顔一つせずに、引き受けた。橘の性格上、王子様なんてやりたくないのは、間違いない。ここ数カ月のクラス委員のお付き合いで、周囲の創る王子様キャラに関して、たまに洩らす少し困ったような言葉を聞いているせりかは、少なからず同情してしまったが、シンデレラはせりかにやって欲しいとクラスの皆に言われた時には、その同情も何処かに飛んで行ってしまった。少し躊躇いながらも断りたい旨を示すが、皆もやるからには失敗したくないし、しっかりしていて容姿も整っているせりかが適任だというのがクラスの総意で、

懇願されてはせりかも断りきれなかった。

こうしてせりかの忙しい日々が始まった。皆それぞれ得意分野に分かれて、自主的に仕事を引き受けてくれるので、クラス委員としては、なんて良いクラスだと思う。一番難しいと思われた台本作りも、元々そういう事を将来の仕事にしたいと考えているクラスメイトが、何本か案を持って来るからその中から面白く成りそうなもので行こうという安心感たっぷりの言葉をくれた。

ダンスシーンだけは十分、練習を余儀なくされた。ワルツの踊れる高校生などそう居る訳もないが、やはり、一人や二人嬢ちゃん、坊ちゃんがいて、小さい頃から嫌が応も無く叩きこまれている二人の経験者が、先生となってダンス教室をしてくれる。配役はそれを見越して運動神経の良い者が選ばれている。

最初こそ、皆、男女が身を寄せて踊るダンスに照れるわ、腰が引けるわで、見れた物では無かったが、舞台上で失態を見せる事を思えばやるしかないと腹を括ったらしく、それなりに踊れる様に成るのは相当早かった。踊れる様に成ると楽しくなって来てしまい、現金なもので、あんなに最初苦戦したダンスが最近の一番の盛り上がる場へと変わって来ていた。橘が部活がある為、代役がせりかと踊ってくれるのだが、この代役はワルツの先生役の片割れの坊ちゃんが演ってくれる為、リードも巧みで本当に踊りやすい。皆から見ても優雅に見えるらしく、せりかのシンデレラ役は好評価を得ていた。これで本番に橘と上手く踊れば、なんとか大役を果たせそうだった。

部活を終えて皆に謝りながら練習に参加する橘は、最初からワルツを踊れたのかと思う程、上手だった。それを口にする、家でもステップを踏んでいて、毎日練習しているらしい。家族に気味悪がられていると告白すると、その場の全員が笑い崩れた。橘は天才では

なく、努力の人だとクラスの皆にも段々分かって貰えて来ている。代役の子にも昼休みに付き合っ貰って、マンツーマン指導で教わっている。

皆で、一生懸命何かを創り出すと言う共同作業は、とても楽しく、特に努力を怠らないクラスの王子様が牽引役となつて皆を引っ張ってくれていて、五組は一つに纏まっていた。せりかも今迄、あまり話した事のないクラスメイトとの触れ合いに心温かくなっていた。特にダンス先生の坊ちゃん、本庄綾人ほんじょうあやととはよく話す様になった。本庄は、皆から坊ちゃん坊ちゃんとあだ名で呼ばれるのに最初はムクれていたが、皆からすると親愛と感謝の入り混じった呼び名だったので、せりかがそう説明すると、仕方無く受け入れると言った。シンデレラを多分嫌でも一生懸命やろうとするせりかの言葉は本庄には、響くものがあった。橘も相当、努力型だが、せりかもそうだというのが練習を通して本庄には分かつて来ていた。

見た目も頭も申し分無く運動神経も良く、委員の仕事もそつなくこなす二人に、クラスメイトは、多少の羨望と嫉妬の入り混じった感情があったが、文化祭の準備が始まるとそんな気持ちは綺麗さっぱり消えてしまった。どれだけ二人がいつも大変な仕事をしているか、皆の面倒をさりげなくみてくれていたかを放課後に残る事で目のあたりにしたからである。しかも軽々とこなしている訳でも無いのは見てとれた。二人の（特にせりかが）鬼気迫る迫力で、面倒事を次々と片づけていく様子には頭が下がった。皆で手伝う事を決めて、出来る限りフォローしなくては申し訳ないとほぼ全員が思った。

本庄も最初はいつも完璧な二人が、ワルツに四苦八苦するのをほんの少しだけ、小気味よく思っていたが、真摯な二人を見れば直ぐに自分の考えが愚直であつた事に気付いた。改めてみれば、せりかは、手を取るのも照れて頬を染めながらも、何度も、何度もステップを

踏む。自分に対しても感謝の気持ちを顕わに親愛の笑みを向けてくれる。いい意味で普通の躰の良い女の子だった。皆は、ふざけて『坊ちゃん』と本庄を呼ぶが、せりかだけは、一度もそう呼んだ事がなく、『本庄君』と呼んでくれる。直接的ではないが、ワルツが出来る事をばれてしまった所為で申し訳ないと言う様な趣旨の事を言われたので、そんな事は何でも無いと答えれば、ほっとした表情を見せた。本人はシンデレラの大役だけでも荷が重いだろくに、氣遣いにも程があると少々おかしくなって笑ってしまうと、『ワルツが出来た人がいて本当に助かったと思ってとっても有り難い気持ちでいっぱいなのに笑うなんてひどい・・・』と本気でムクれられ、本庄は少々、困ってしまった。椎名せりかが義理難く、氣さくでいてそれでいて思っていたよりも子供っぽいからだ。しかしまだ、高校一年の女の子だと思うと、今迄がどれだけ神聖視という名の偏見で見えていたかという事に、随分と自分が浅慮であったと思った。他のクラスメイトにしてもそう思っていると思う。

よく話す様になってからも、せりかは本庄の家の事などには決して触れてこない。最近見た映画の話だったり、女子だけでやっている衣裳作成の苦労話等をユーモアを交えながら、話してくれる。どちらかというと本庄は聞き役だ。本庄は笑いながら、話の途中で突っ込むと切り返しもとても見事でこちらを不快な気持ちにさせるといふ事がない。ダンスの時の初さから考えると男兄弟でもいるのかとこちらが踏み込んだ事を聞いてしまっても、多分、幼馴染の一組のと思つと簡単に答えてくれた。自分の事は殆ど話さない割に、せりかに関しては、詳しくなってしまうていた。高坂が生まれた時からのお隣さんだという事や、彼女の母親がイケメン講師目当てに英会話に行っている話まで、話の流れで話してくれた。言ってしまうから要らぬ事まで話したかな?という後悔が少しみえたので、『他には、椎名さんの個人情報ば流さないよ。他の男子にいろいろと聞

かれるけどね』と言っておくと『流石、先生』と返された。教える立場からか、彼女はたまに先生と茶化して呼ぶ。女子はどちらかというと坊ちゃんよりもそちらの方が浸透している節もある。文化祭も終わって落ち着けば、元の名字呼びになってくれるとは思っているが…。坊ちゃんよりは何倍もましな呼ばれ方ではあった。

そうして、着々と一年五組の「シンデレラ」が完成されつつあった。

「ラブシーンが最後に無いと劇全体が締らないんだよ！やっぱり！」

台本と演出担当の荒井美奈絵が出来上がりつつある「一年五組版シンデレラ」に対して、声を張りあげる。

「「「「はあ〜？」」「」「」」

呆れた様に皆、力の抜けた答えを返す。特に当事者の二人は苦笑気味だ。

「あのね〜。荒井さん。演出に力入れてくれるのは嬉しいけど、それはちよつとやり過ぎだと思うよ」

せりかが軽く注意をいれると、橘を始め、周りの者も頷いた。

「そうだよ。学園祭でそこまでやったら指導はいっちゃうんじゃないかね？」

「主役の二人にも悪いよ。そんな演出は」

次々と荒井を諭す言葉が出るが、流石プロ志向だけあって少しそれっぽいい感じでいいから！と粘られる。

「大体、少し抱き合うふりなんてダンスとそう変わらないじゃない？」

「「「「違う〜！！！」」「」「」」

踊る連中からは悲鳴が上がる。

本庄がダンスの先生として見かねて代表で物申してくれる。

「ワルツをしない人間から見ると抱き合っているのと近く見えるかもしれないけど、踊る当事者からは天と地程の違いがあるんだ。みんな、ダンスなら恋人じゃなくても手を握れるけど、それ以外でそういう事は無理だろう？女優や俳優じゃないんだから、そんなに割り切れないよ。まだ高校生なんだし」

「そうかく。ごめんね。出来あがりがどんどん良くなって来たら欲が出ちゃって。私も大分、無理目な事を言ってるのは分かってるんだ・・・」

荒井が、しょぼんと肩を竦めると皆、責めた事に段々罪悪感が湧いて来た。彼女は、そもそもよくやってくれているのだ。彼女無くしては、劇も素人ばかりで形になったかどうか分からない。

気まづくなった内のひとりが爆弾を放り投げた。

「キスシーンは？もちろんフリだけで。それで幕が降りれば、かなりめでたしめでたしっていう感じじゃない？」

「フリだって流石に見てる先生とかも分かるだろうし、それならば注意は受けないかもね」

「そうだよ。ホントにする訳じゃ無いし、そういう場面があったらすっごい素敵かも」

女子中心にかなりの盛り上がりでキスシーン（フリ）の追加がついに決定してしまった。せりかにしたら大ショックだが、橘も口も挟めない状態でせりかを見るので、安心させるように『大丈夫、フリだけだし劇がうまくいったほうが嬉しいから』という橘も頷いた。

しかし、あからさまな、フリなのもどうなのか？やはり一気に、冷めるのではないかという話になり、クラスの皆が、客席予定の色々な位置に立ち、照明も夜で、月夜バージョンに落として、どうしたらどの角度からみても離れて見えないか？という実験がはじまった。

せりかはやると言った手前、頑張るが冷や汗が出て来た。せめても
の救いが衣裳を着ている事だった。これが制服だったら本当にもう居たたまれない。橘の王子様の衣裳は、緋色のマントに黒のタイネクタイをしたスーツだった。物語の王子様っぽくないが、かぼちゃパンツは、似合わないからという理由でドレスもすべて現代風に
する事で、浮かないようにしたが、橘の存在自体が、佇んでいるだけでも充分に目を奪われるので、あまり意味がないのではないかとせりかは思った。しかもタキシード風なスーツとマントじゃ、ドラキユラ伯爵に見える。しかし、橘が着るとそれに王冠を載せただけで充分王子様になるから摩訶不思議だった。

現実逃避すべく色々な事を考えるが、キスシーンは顔を限界まで近付けるので、もうビクビクである。橘や、本庄が、やっぱり止めたほうがいいんじゃないか？と取りなしてくれるが、見ている皆が、変な演出家スイッチが入ってしまった、「もうちょい角度右で」とか「少し手を添えると隠れて離れてるのが見えないからやってみて」と指示が色々な所から飛んでくる。それに少しずつ答えて行くうちに、全員からOKサインが出た。わぁーとか、おぉーとか出来あがりに歓声が沸いた。

「すごい雰囲気ぐつと締っていい絵になるよ！！やっぱりこれだ
いこう。立ち位置とか角度とか充分に今の覚えこんでね！」

荒井が興奮して言うが、心の中はへなへなになっているせりかにこ
れを覚えている自信は全く無い。橘を頼る様に見ると、ガムテープ
を小さく分らない位にこっそりとその場所に貼った。それから携
帯を持って来てもらい、本庄に写メールのムービーで体勢を一周ま
わって撮ってくれる様にリクエストしていた。流石、頼りになるな
あと変に感心する。本庄も冷やかす事も無く、黙々と作業をこなし
てくれる。先生ありがとうと心の中で手を合わせる。こんな撮影、
本庄で無ければ冷静にやってくれられないと思うと橘の人選にも唸
らざる得ない。

「有難う。橘くんも先生も」

少し涙目になりながらお礼を言うと、二人がぎょっとしてせりかを
見たが、本庄は早く涙を拭け！！とやや命令口調でハンカチを押し
付け、橘は口元を押さえて顔を赤くした。

「どうかしたの？」とせりかが不思議がると「これだからお子様は
！！」と本庄には珍しく悪態を吐かれた。橘は僅かに微笑んで、後
で、メールで写メ送るねと優しく言っただけで質問には答えてくれ
なかった。何がいけなかったのか帰ったら玲人に聞いてみようと思
りかほ思い、それ以上聞くのをやめた。

帰ってからせりかは、恒例になっている二人の勉強会の後に、今日

の事を劇の事だけすつとぼして玲人に聞いてみた。玲人は、一瞬絶句するが、その後、呆れたように溜息を吐いた。

「あのさー、違ってるの分かって聞くけど、特に意図はないんだよな？」

「意図？って何の為の意図よ」

「やっぱり微塵もないんだな。分かってくれてる本庄に相当感謝すべきだな」

「ハンカチ押し付けられたけど別に拭かなくちゃいけない程、潤んでないよ。少し熱とかあるとウルツとするじゃない？あれくらいだよ。しかもなんか達成感と緊張が解けたんで気が少し緩んだだけで、泣いちゃったわけでもないのに・・・」

「あのなー。鈍いのもいい加減にしてくれっていうか、多分俺の所為か・・・。今迄、せりの周りから男連中排除してたから、極端にそういう事に疎くて無防備にさせてるんだな。ごめん!!」

「なんで玲人が謝るのかも訳分らない。確かに今迄、すこーし免疫薄いかもしれないけど女子校育ちじゃ無いんだし、喋ったり普通にしてきたんだよ？」

「うーん、なんて言ったらいいか分かんないから直訳しても怒らないか？」

「うん。怒らないから、はっきり私の至らない事を言って？それだけは本庄君の言い方で何と無く分かったんだよねえ」

「一言で言うと、それは普通に見れば、男を誘っている様にみえるんだよ。せり…」

「はあー？ 初心者が二人も一遍に誘えるわけ無いじゃん。ばっかじや無いの！！」

「だから、無意識でやるのは無防備の馬鹿なの！それを気付いて本庄が止めてくれたんだろ。お前にそういう気が無くても男の方がグツとくるの！！」

「誰にでも来るわけ？ 節操ない感じ。普通、好きな人だけじゃないの？」

「高校生の男なんて大抵そんな事しか考えてねえよ。今迄そういう俺が排除して来たから危機感薄いかもしれないけど大抵の男ならせりはストライクゾーンだからある程度、気をつけないと駄目なんだよ」

「なんか私って、鈍くてすごく駄目な子みたい」

「みたいじゃなくて、だめだから！！」

「きつい。でも玲人じゃ無いとこんなにはつきり教えてくれないんだから感謝しないね。ありがとう。橘くんと本庄くんも教えてくれなかったもん」

「それは、無理だろう。半分自分で気付くようにしてくれてる分、本庄は場馴れしてるのか、ちょっと話聞いたら普通の奴と違うよな？」

「そうだね。悪いから、直接は聞いてないけど、噂では、結構有名な企業の御曹司って聞いたけど。でも本人あまり言われたく無さそうだから、玲人も余計な事言わないでね」

「セレブで女慣れしてるって事か・・・」

「そんな感じ悪くないし、全然チャラくないわよ。なんだか色々と面倒見も良くて育ちがいい感じで他の子よりも少し丁寧な感じ？粗野の反対で：優雅って言ったらちよつと過ぎるけどなんだか自然にジェントルな感じって言ったらわかる？」

「ああ、大体分かった。まあ、いい奴なのもわかる。せりが、結構ボケてるのを知ってて、面倒見てくれてて、なんだか俺も手を合わせてお礼言いたくなってきた」

「私なんていつも心の中で手を合わせてるよ。実際言葉でも言うけど。ハンカチのお礼と共に何か作ろうかな？」

「ああ、それ駄目。アウト。そいつにも、またお目玉喰らうと思う。少量の買ったチョコか飴がベスト。いつも噛んでるガムとか？そういう軽ーい感じのにしとけ」

「分かった。そうする。遅くまでありがとう。聞いてくれて助かった。玲人には文化祭終わったらお菓子作ってあげるけど、それはセーフ？」

「もちろん！！」

満面の笑みで玲人が答えた。せりかも気になっていた事が分かったので、内容はどうあれ気分は良かった。これで数日後の文化祭がう

まくいけば言う事なしなんだけど、といった気持ちになった。

文化祭当日になった。

今日は一般公開のない校内だけの公開なので模擬店も割合空いている。

せりか達のクラスの劇は、明日なので、チラシを校内で、配り終わると、後は自由時間となった。部活動などで、展示やお店を出している者は、そちらに行かなくてはならないが、せりか達は文化部にも入っていない為、模擬店を見て回る事にした。美久と弘美と三人で、一年一組のメイド&執事カフェに行ってみる。

一組のカフェは大盛況で、入るのは躊躇われたが、玲人がせりか達を見つけて声を掛けてきた。

「せりー。来てくれたんだ。奢るから、こっちにこいよ」

お友達特典で空いている目立たない席に滑り込まされる。

「これって、横入りじゃないの。大丈夫なの？」

せりかは、こういう固い所があり、理不尽な事を嫌うところがある。玲人は、ここは特別予約席だから大丈夫だと宥めた。他の子達も特別に親しい子が来た時に自分が対応する事を条件に許されている席らしい。そういうことなら、とせりかも納得して席についた。

「お帰りなさいませ。お嬢様。お飲み物は何に致しますか？」

執事姿で軽く腰をおり、多分お決まりのセリフを玲人が言う、せりかと美久は笑い崩れた。

「似合い過ぎー！！高坂君カッコいい。一番人気なんじゃないの？」

「玲人、天職だよ。執事っていうか、ホストっぽい！」

けらけら笑いながら、褒めてるんだか貶してるんだか分からない言葉を掛ける。二人とは対照的にあまり玲人と面識のない、高校からの友達である斎賀弘美は、頬を染めて玲人に見惚れてしまっていた。

「それで、お嬢様がた？お飲み物は？」

「アイスコーヒーお願いします」

「美久と斎賀さんは？」

「うーんとオレンジジュースで」

「あ、私も！」

「かしこまりました。少々お待ちください」

玲人が去っていくと三人できゃあきゃあ騒ぎだした。

「玲人も似合うけど、女の子のメイド服もかわいいね。一回着てみたい」

「そうだね。みんな三割増しかわいく見えるよね。執事さんも見たい目重視みたいだし？」

「確かに。厳選してるみたいね。けっこうシビア……」

「せりかもそう思う？ 執事さんも衣裳カッコいいし、店も本格的。ステンドグラスとか使っててアンティークな喫茶店みたい」

「二組も頑張るよね。明日は負けてられないね！」

かしましくお喋りしていると玲人が飲み物とショートケーキを持ってきた。

「お待たせ致しました。どうぞ」

いつもに無い玲人の氣取った所作と笑顔に、せりかも楽しくなってきた。

「執事さん？ ケーキは頼んでませんけど？」

おどけて言う

「お嬢様方の為に特別に用意させて頂きました。宜しければお召し上がりください」

それらしく、恭しい態度の玲人がまたツボに入って、美久とせりかは笑い出す。弘美だけは首を傾げてお札を言うのと、玲人は、『喜んで頂けて光栄です』と微笑んだ。

「ありがとう。玲人もあっちで、呼ばれてるよ？ 私達は充分楽しませてもらったから」

「ああ、ゆつくりしてつてくれ。俺も明日の劇見に行くから席キープしといて。結構評判になってるから混みそうなんだよ」

「王子様がねー。橘くんじゃ、宣伝しなくても人が来てくれるから助かるよね」

「せりのシンデレラも笑いに行つてやるから。後、忍も冷やかしてやれるから、今から超楽しみ!!」

「冷やかすのは、終わつてからにしてよ？唯でさえ、私も橘くんも緊張してるんだから」

『わかった、わかった』と言つて玲人は他のテーブルのお客さんの元に去つていった。

それにしても執事の玲人は大人気だった。せりか達がいる間もあちらのテーブル、こちらのテーブルといった感じで中々忙しい。一緒に記念写メ等も撮らされていて、笑顔で楽しそうに対応している。これがもし橘だったら相当苦行だろうと思われた。反対に玲人が王子様でも楽しくやってくれそうだと思うと玲人は、いつもポジティブだなあと感心させられた。橘がネガティブなのは決してない。あちらの方がごく普通の反応で、玲人の方が、ある意味特別強靱な精神の持ち主なのだろう。騒がれてもそれはそれで、相手も自分も楽しくさせられている様に見える。

玲人に皆でお礼を言つてから一組を後にした。後はタコ焼きをたべたり、綿菓子を持って、ヨーヨー釣りなどまるで、お祭りに来たいである。おまけに全てが安価である為、買うのになんの躊躇いもない。明日の衣裳が着れくないといいんだけど、と思うが楽しむ方を優先した。弘美が射的でおおきなぬいぐるみを当てて、

嬉しそうに抱えているのも微笑ましくて自然と笑顔になる。そうしているうちに同じ様に楽しんでいる橘と本庄とすれ違った。橘がせりかに声を掛けて来た。

「玲人のところ行ってやった？」

「行ったよー！笑い過ぎてお腹痛かったよ。あんなに気取った玲人初めて見たから結構驚いた！」

「椎名さんの幼馴染の彼、スゴイ迫力あるね。カッコいいんで初めて見たから結構驚いた」

「男の人から見てもそういう事思うものなのね」

「むしろ男の側から格好良く見えるタイプだよ。体格とかも筋肉質で、でもすらっとしてて理想的だし。橘も綺麗な顔してるけど、男からすると見た目だけに聞けば高坂のが羨ましいね」

「せんせい？橘くんを目の前にして失礼じゃないかしら？なんといつてもうちのクラスの王子様なんですからね！」

「ははっ。気を使ってくれなくてもいいよ。俺もサッカー部で玲人くらい体格恵まれてたらっていつも思うもん」

「私からしたら、知らない人から写真とか強請られて、平然と楽しく一緒に映っちゃう図太い神経が一番羨ましいけどね・・・」

「「それは確かに」」」

皆の声が揃ったので、せりかは、嘖き出してしまった。

本庄がせりかにだけ、こそっと「何か俺の事を話した？」と聞くので「この間の教えてくれなかったから玲人に聞いた時に先生の事もはなしたけど」と答えるとはあーとタメ息をついた。

「せりがお世話になってますって彼に言われたんで、何かと思ったけど」

「引かないでね？私も他に聞ける人居なかったから聞いちゃったんだけど、玲人にも先生に感謝しろって言われて私も反省してるから」

「何こそこそ内緒話してるの？」

美久が入って来たので、玲人のことを説明してたと言ったら直ぐに納得してくれた。親し過ぎる間柄に説明が必要な事が、今迄も少なく無かったからだった。それに嘘は言っていないから後ろめたさもなくていい。

それから5人で展示物を見てまわったり、お化け屋敷に入ったりした。しかし、学生の造るお化け屋敷はやはりあまり恐く無かった。せりかと橘は内心、来年はお化け屋敷はなしだなと思った。気が早い、委員になる可能性が高い以上、見る目が粗を探してしまうのも事実だった。

そうして文化祭1日目が終わった。

とうとう文化祭二日目のせりか達の劇の上演日になった。

せりかは、緊張で朝から食欲も無かった。せめてもの救いは相手役の王子様が、実際にも陰ながら憧れている王子様という一点につきた。

何をしてもしつなくなし、面倒事も厭わない橘は、人間としてもせりかの理想形だった。あんな風に自分もなれたらいいと思う。橘の傍にいられる権利を手に入れたいと迄は、思い詰めた想いではなかったが、彼が、笑いかけてくれたり、話したり出来た時には、少しハッピーな気持ちになれる。なんだか片思いついていいなと最近のせりかは思ってしまった。今迄にそういう感情を持った事が無かった為、こういう恋の仕方もアリかな？と思う。なにも報われなくてもいいのだ。報われれば面倒な事も一緒に付いてくる。本人とも合わないところも出てくるだろう。せりかにとっては、今が一番の最良で幸せな状態だった。故に、いくら美久や弘美にせっ突かれでも告白する気なんてさらさらない。『誰かに取られちゃうわよ』なんて美久達はいうけど、その時は、あの橘が選んだ相手なら納得出来そうだった。今迄、毎日小さな幸せとときめきをくれる存在の橘に感謝すらしていた。それは彼に特定の彼女が出来たとしても寂しくは思うと思うが、無くなってしまふ思いではないと思う。

今日はそれだけ思い入れのある相手との共演なのだから、失敗は許されない。セリフもダンスも完璧に覚えた筈だったが、それでも何度も台本を見直してしまっていた。当の本人の彼は、『間違っても分からないから大丈夫だよ。俺もその時は合わせるから慌てないで落ち着いてね』と相変わらず完璧なフォローぶりだ。しかし、立場

は相手も同じ事を思えば相手にばかり甘えていられない。自分も今日は完璧でありたいと思うと余計緊張して来てしまうのだった。

家族席チケットは二枚迄で、玲人の両親の分も考えると足りなかったのだが、美久が親が来る予定がないからと二枚融通してくれた。弘美もそれを知っている為、ケーキとジュースのお札にと玲人に二枚渡してといって渡してくれた。玲人は、もしかすると美久達が融通してくれる事を分かっていて先日過剰な御馳走をしてくれたのでは無いか思う。今時、あまり親など文化祭になど来ない。それを思えば、一番近しい二人がチケットを譲ってくれるというのを予想したとしてもおかしくはない。

皆で見に来られるのは恥かしいのだが、人生で多分、初めてで最後の主役だと思うと嬉しそうに玲人の小母さんと来る算段をしている親を止める気には成れなかった。

橘が王子様役だと知れるや否や、五組の劇は注目の的だった。橘もサッカー部の先輩達に強請られてチケットを融通してもらっていた。普段同じクラスでも無ければ見れない橘の王子姿を見たいと思うのは当然だろうと思われた。しかし、サッカー部の先輩は、もちろん橘が見たい訳ではない。橘と玲人にガードされているお姫様のせりかを見れるのを楽しみにしているのだが、鈍いせりに分かるはずも無い事だった。

用意した席が足りず、立ち見客も多い中、「一年五組版シンデレラ」が幕を開けた。

一般的なシンデレラは、舞踏会に行きたくても、行けなくて泣いている所に、魔法使いが現れていドレスや馬車や、靴を用意してくれるが、五組版シンデレラの性格はまるで、せりかの様であった。

義理の母と義姉達とは犬猿の仲であるが、伯爵家の爵位の継承権はシンデレラに有り、実質家の中を、取り仕切るのはシンデレラであった。

「おかあさま、お義姉さま、無駄遣いはお止しになって。どうしても舞踏会に行きたいのでしたら、私の言う事に従って頂けなくてはお許しできませんわ」

地味な灰色のドレスを見に纏ったシンデレラは、きつくそう言い放った。

会場が、高飛車で気の強いシンデレラに笑いが漏れた。

「まずは、ドレスは、私が作って差し上げるから、服飾の業者などお呼びにならないでね。今の時期は高くされています。宝石類は、新たに安物など、お買いに成らずとも、伯爵家が管理しているなかでドレスに合う物をお借ししますわ」

「わかったわ。シンデレラ。あなたの創るドレスは、売っているものより素敵なもの！」

義姉達は嬉しそうに、シンデレラの言う事を聞く。義理の母も渋々、頷く。

「それから、使用人を遅くまで待たせる訳には行きませんか、十

二時までにはお城の門のところに帰ってらしてね。それより遅かったら置いて行きますから」

小姑のようなシンデレラだが、家の女主人としての威厳と慈愛に溢れていた。

其れからは何枚ものドレスに、ミシンを踏むシンデレラの奮闘場面となり、舞台上の健気なシンデレラに基本的に努力家の多い、この学校の生徒の共感を呼ぶ。

「お姉さま達の分は、出来あがったから先に行ってらして下さい。私は、後から行きます」

義姉達は、シンデレラ作の趣味の良いドレスに身を包み、まだ会った事もない王子様を思い、夢心地で出掛けていく。

シンデレラは一人残って、ミシンを踏み続ける。

そこに、お決まりの魔女が登場する。周りの噂で、継母達にいじめられて、舞踏会に行けないであろうシンデレラを助けに来たのだが、丁重にお断りされてしまう。

「わたくし、お父様にタダで人様からものを貰ってはいけないと教えられていますの。私もそれは、道理に適った事だと思っていますので、すみませんが頂けませんわ」

「でも舞踏会にいけなくなってしまうですよ」

魔法使いは必死に言い募る。実は伯爵と共に登城するシンデレラを見染めた王子からの使いだったのだ。喜んで来てくれると思ってい

た為、困って唸ってしまう。

なんだか困ってしまった魔法使いを見かねたシンデレラが、魔法使いの懇願を受け入れる形で魔法に掛かる。

魔法使いが杖を振ると、ぱあーと今迄の灰色のドレスが紅色の美しく華やかなドレスに変わる。皆、魔法のシーンは無いと思っていた観客は急な手品のような早変わりに驚きの声を上げた。

すこしスモークをその後焚いて、大振りなイヤリングやネックレスと巻き毛のウィッグに華の髪飾りを手早く付けると観客からは、拍手が沸いた。まだ劇の中盤なのだが…。

馬車に乗る陰で、口紅やアイシャドウが施される。

お城の広間に立った、シンデレラの美しさに、フロア中の皆が見惚れるという設定だが、客席も先程の早着替えを見ている為か、キラキラのシンデレラに息を？む。

それからは、見せ場のワルツである。待ちかねた王子様が駆けより、皆でワルツを踊る。一番の見せ場である。

優雅に踊る群舞に客席からは、溜め息が漏れる。華やかでいて統制の取れた動きは圧巻であった。王子様の橘の美麗さも際立った異彩を放っており、父兄の間でも、滅多に見れない、本当に物語に出てきそうなキラキラ王子に会場がどよめいたのがはつきりと分かった。

流石の現実主義なシンデレラも美し過ぎる王子に言い寄られてアタフタしてしまう。これは演技の設定だが、演技だと分かっていても

橘の甘い言葉にアタフタしてしまうのだから、脚本がありがたい。夢見がちな女の子ではなく、現実的な子を落とす、かぐや姫のような美しさを作るのだと言って、演出の荒井から、橘には毎日の肌の手入れの指示や、眉を整えられたり、軽く舞台用に化粧まで施されていて、本当に、月に帰って行ってしまいそうな美しさで色香を湛えていた。そして、王子はシンデレラに婚約を申し込むのだが、驚いたシンデレラは、会って間もないのに、そんな事を急に言われても…と躊躇する。全くもって現実的である。普通、そんな簡単に人生決められるものではない。そこへ十二時の鐘が鳴ってしまう。なり終わらないうちに、シンデレラは門迄走って、屋敷に戻って行ってしまふ。王子さまは追い掛けるが、ガラスの靴だけが、残されていて、この靴の持ち主と結婚すると言い張り、一応、皆にチャンスがある様に演出をする。結婚もドラマティックにしなければ、国の祝い事も効果が、半減になってしまうからだ。こうして、シンデレラの所まで辿り着くのは夜になってしまう。

月夜に、現れた王子に今迄の経緯を聞いたシンデレラは、王子の聡明さに惹かれて、結婚を了承する。そして最後のキスシーンである。前の時に、ぱっちり目を開けたままのせりかに、本庄が、顔が近付いたら、目を閉じる様にアドバイスしてくれていた為、せりかは顔の角度と立ち位置に気を使いながら目を閉じた。しかし、目を瞑ると平衡感覚がおかしくなる事には気が付かなかった。少し揺らめいてしまうのを如何にか橘が支えてくれる。もうすぐ幕が下りると思った所で、事故は起きた。どうしても傾いてギリギリで留まっていた唇が、かすってしまったのだ。橘もせりかも内心はパニックだが、周りには気付かれていない。元々、そう見える演出なのだから。せりかは橘に直ぐにでも謝りたい気持ちになったが、劇を最後まで演じ切った。

会場からは、割れんばかりの拍手が起こり、カーテンコールに主役

のふたりで出る事になった。二人で出て行くと興奮したお客さんから拍手と歓声が上がった。劇が成功した事を感じ、せりかと橘は深々と頭を下げて、また幕が下りた。

橘くんは、『ごめんなさい！私の不注意で本当にごめんなさい』とメールを打とうとしたけれど、送信は出来なかった。直接言わなければ謝罪にならない気がしたからだ。明らかに私がよろめいた為の事故であちかも、もしかしたら初めてかもしれない。女の子の方だけが、そういう事にロマンを持っているわけでも無いだろうと思う。よっぽど異性との付き合いが雑な人ならともかく、橘はそういうタイプではない。玲人に相談してみようかと思うが、相手のプライバシーにも関わる以上、友達でもある玲人に話してしまうのは、やっぱり悪いだろう。やはり、二人きりになれる時に、直接謝るべきだろう。

一年五組版シンデレラは、全体の催し物部門で最高ポイントをゲットして、（投票箱が設置されているのと、お客さま動員数と先生の投票数で決まる）一年のクラスとしては異例の最優秀賞を獲得した。観客動員数の多さもさる事ながら、内容に随分の脚色があったが、それが持ち点数の高い先生方に、高い評価を得たようであった。少し、道徳的なところを説いていると思われたらしい。演出の荒井にその意図があったかは分からないが、皆がとても喜んだのは間違いない。副賞は驚いたのだが、生徒会が用意してくれたカチューシャだった。いくら、今流行っているからっていつでも装飾の類が、商品って大丈夫なのだろうか？

気にしていると色とりどりのリボンの付いたものから、レースのものまでいろいろあって、皆で各々、好きなものを選ぶ。せりかは、茶色のシンプルな物を選んだ。男子は使わないし、こういう風にな

るのかと思ったが、姉、妹、彼女、友達、もしくは、これにあやかって好きな子に告白して渡すという選択肢を生徒会から提案されると、会場がどっと沸いた。はやし立てて、「がんばれよう！」という声が聞こえてくる。きれいな透明な袋にリボンで可愛く包装されていて、如何にもプレゼント用だった。男の子達も誰の顔を思い浮かべながらは、謎だが、結構真剣に女子と共に選んでいる様子は可笑しくも微笑ましくもあった。やはり、戦利品である以上、普通に買ったものよりも嬉しい。

女子は全員その場で装着して、皆で似合うとやんやと褒め合って、勝利の美酒に酔うという感情に近い気持ち良さを味わった。皆がそれぞれ、いい仕事をしたという満足感で一杯だった。

生徒会の片づけの人がちらほら見えるが、他の人達は大体帰ったが、五組の皆で、帰り難く、輪になって騒いでいるところで、それは起こった。

橘が、せりかに近づいて来て、目の前に真っ青なりボンのカチューシャを差し出した。早くもお友達にくれる気になったのか？と誰もが思ったが、その後、橘の発した言葉が、それを裏切った。

「椎名せりかさん、俺と付き合ってください」

はあ？？生徒会推奨を早速、使いますか？みんなビックリです。でもその場のノリの類で済みますのが、ここは得策だとせりかは考えて、にっこりと「喜んで」とカチューシャを受け取ると、皆からは拍手が起きた。冷やかす者は誰も無く、普段から仲が良く、主役も演じ切ったツーカーの学級委員二人のノリの良い余興だと思われたようだ。せりかの軽い快諾の言葉が、そういう風に思わせる要因だった。普通は、皆の前で告白されて平然と即座に返事したりなんて

しない。慌てたり、テレたり、狼狽したりするのが多分、正しい反応だろう。余興にも盛り上がったところで、後日打ち上げをする事になり、皆で家路についた。

わらわらとクラスの皆と美久や弘美と校門まで行くと玲人が待っていた。どうやら両方の親が、近くの喫茶店で待っていて皆で食事でもしようという事に決まったらしい。二人に簡単に説明して別れて、玲人と二人で駅とは反対方向に歩き出した。それを見たクラスメイト達は、先程の二割位残った疑念も晴れたようだった。橘も近くにいたが、玲人が親しげに手を挙げて向こうもそれに応えて手を挙げた。どこから見ても、先程の事を真実、真剣なものだったと思うものは、これで限りなくゼロになった。

せりかは、自分の所為で唇がかすってしまった事を謝らなければならないが、まさかその事で、責任を感じて言いだしたことじゃないよね？と橘にしては笑えない冗談に不可解なものを感じていた。いずれにしても後日、橘と二人で、話合わなくてはならないだろう。

「どうしてあんな所で告白なんてするんだ？橘らしくないよ」

本庄が怒りを含んだ口調で橘を責めた。

「二人きりでしたら断られるもん」

珍しく酷く子供っぽい事を言う。

「それは、仕方無いだろう。向こうの気持ち次第の事なんだから、断られたらすっぱり諦めるしかないだろう。ストーカーか？お前は？」

「そうだよね。でも諦めたく無いって思ったら、あの時、すっごくチャンスだと思っちゃったんだよね」

「お前みたいなやつが正々堂々と行かないなんて超意外！！大体断られるって決まっては、いないだろう？」

「またまた、本庄だって100%うまくいかないの分かってるくせに」

「それは・・・」

本庄は言い淀んだ。最近仲良くなったせりかの性格が分かってるだけに、おそらく丁重にお断りされてしまうだろうと思う。たとえば、この超美形で中身も言う事なしの橘であっても無理だろう。本庄の見るところ、せりかはひどくアンバランスな人間だ。人としてはし

っかりしているが、女性としては、とても幼いように思う。その落差が激しく、少し危うく見える。その上に、あの幼馴染の玲人の存在が彼女の中で大き過ぎて、恋愛関係ではないといっても、二人の中に割って入るのは困難に思えた。

「やっぱり、分かってるよね。だから、少し思いつめ過ぎて暴走しちゃったんだけど、後悔はしてないよ」

「本当に思い詰めた人間が、自分で思い詰めてるって言わないだろう!!」

「そうかなあゝ自分では、ここのところ結構キテたつもりだけど。劇の練習とかでいつもより接触時間が多いから、そうするとまた、いいところ発見!! ってなっちゃって嵌まってちゃうんだよな」

「お嬢は、確かにいい子だと思うよ。素直でかわいいし、クラスでも結構人気あるけど、お前と高坂で囲んでるのに特攻する無謀な奴なんていないんだから、もう少し余裕持ってゆっくりいけよ。じゃないと椎名さんにとって迷惑でしかなくなるよ」

「すごい高度テクニックでスルーされたもんなん」

「そうだな。校門のところに高坂が居たのも痛かったな。あれで、もう完全に無い事になったな」

少し、憐憫な目で橘を見ると、苦笑いを浮かべたので、こちらが思っているよりはショックを受けているのだろうと思った。

「これからどうする気？」

「どうしようか？相手の出方次第かな？」

「距離置かれちゃうんじゃないの？多少、警戒心持たれちゃってるだろうし」

「それは、そうだけど、あっちから近い内に二人で話す機会を作ってくれる筈だから」

「スルーされてるんだし、きっと、なるべく普通にしつつも二人きりでは話してくれないんじゃないかと思うけど」

「本当に内緒だけど、本庄にだから言うけど、実は劇のキスシーン、とちって本当にしちゃったんだよね」

「お前、まさか！！」

「誓ってわざとじゃ無い！！どちらかというと椎名さんがよろめいたの支え切れなくてかすっちゃって、超パニックだったから。もちろん少しは嬉しかったけど、向こうには、ものすごく申し訳なさそうにされてて、めちゃくちゃ謝られそうな気配でさ！もう、悲しくなって来たってわけ！だから、そのおかげで話す機会は椎名さんから作ってくれるのは間違いないんだよ。彼女は謝罪はスルー出来ない性格してるから」

「じゃあ、天下の王子様のお手並み拝見ってトコか」

「茶化すなよ。俺だってどうしたらいいかわからないよ。断るスキルしかないし」

「うわー流石、モデル奴しか言えないセリフ来たーって感じだな」

「お前だって結構断ってるんだからな。俺より、数多いんじゃないのか？」

「どこの情報網？コワー！俺は、落とす方のスキルもあるから心配無用なの」

「俺より大分性質悪じゃないか！落とすスキル、だったら伝授してくれ！！」

「普通仕様はあるけど、お嬢仕様は悪いがない。あれは、レアだから。悪い事言わないから、お前の為に諦めて別の人にしとけて。もう振られてるようなものなんだし。他の子ならよりどりみどりでろう？どうして椎名さんになっちゃうかな？もしかしてあえて無理な山に登る人達みたいに、ややMだったりするわけ？」

「キツイこと言うなよ。別にそういう趣味趣向は無いよ。しかもまだ、振られてないし。強いて言えばOKの返事貰ってる・・・って言ってて自分で虚しくなってきた」

「悪い。俺も言い過ぎだわ。ツツコミどころ満載なんでついつい、いつも言葉が過ぎちゃうんだけど、お嬢は全然付いて来れるからスゴイんだよ」

「謝ってるのに、傷に塩塗ってどうするんだよ！そんなの分かってるよ。いつもお前達の会話、テンポ良くて羨ましいと思って見てたから」

「乙女だね。まあ、協力はするから。相談はいくらでも乗るし、なんなら、俺からお嬢にお勧めしとくから」

「有難う。お前って口固いし、しんどい話も深刻にならなくて済むから実際は助かる」

「やっと分かってくれたみたいで良かったよ。お嬢の方からも相談される事多いから、うまく行くように俺も力になるから頑張れよ」

その日の夜、橘に、せりかから『お話したいことが有るので時間を作って貰えませんか?』というメールが来たので、代休日である明日に会う事になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4353x/>

幼馴染の親友

2011年10月19日02時09分発行